

# 「数理科学」は語る

30年前から現代へのメッセージ

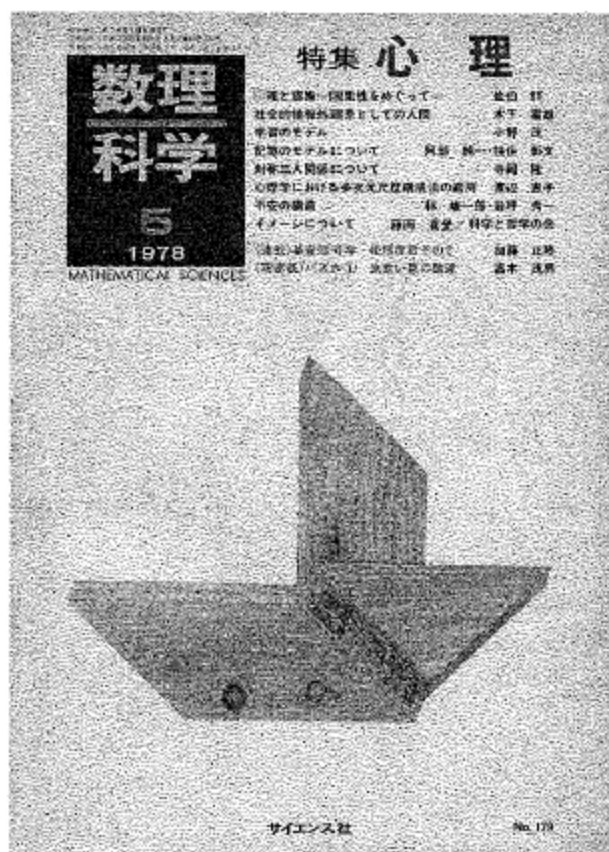
阿部 純一

1978年5月号

1978年の5月号に、「記憶のモデルについて」というタイトルで、人間の記憶現象の説明と予測を試みるモデル化研究の現状を紹介した。

ある時点で記憶した内容の減衰量を時間の関数として予測してみようとする数理モデルが流行した時代がそれ以前にあったが、1970年代には、そのようなパフォーマンスの結果の予測のみを行う研究よりも、人間の記憶の内的な仕組みそのものをシステム論的にモデル化することに興味が移っていた時代であったと言える。そのような、内的な仕組みを明らかにしたいという欲求は、認知科学(cognitive science(s))と呼ばれる学問分野の発展と相俟って、この30年間維持され続けている。その間、認知科学(認知心理学、認知神経科学など)において、記憶、知覚、言語、思考、感情など人間の心的機能とそのメカニズムについての探求は間断なく続けられ、その研究成果も着実に蓄積されてきたと言える。ただし、その研究の進展は、当該分野の専門研究者にとっては、あくまでも着実でなだらかなものであり、決して、急激でめざましいものであったとは認識されていないと思う。

しかしながら、こと一般生活の場における記憶や知能、言語、感情などの心理現象の取扱いについては、30年前とは格段の違いがある。それは、テレビや新聞でのそれら心理現象の取扱いが、当時とは比べものにならないほど多くなってきていることから分かる。研究世界でのそれらの心理現象に対する解明のスピードよりも、一般市民のそれらの現象に対する興味の増大のスピードのほうが、はるかに上まわったということである。この一種社会現象とも言える時代変化を読み解くキーワードの一つは、思うに“脳”である。30年前には“脳”とか“脳科学”という言葉はテレビや新聞ではさほどなじみのある言葉ではなかったはずである。今や“脳”や“脳科学”という言葉は、高齢者の認知機能の問題についてのみならず、子育てから、教育や青少年の行動の問題についてまで、頻繁に登場す



るようになっている。

このような変化は、それだけ脳の解明が期待できる時代になってきていることの現れであるとも言えるが、一面、この社会現象は、いつの時代でも起こり得る、科学の進展とは無関係な単なる人間の“脳の働き”の特徴の一つの現れに過ぎない可能性もある。つまり、ヒトは、“心”、“行動”、“心理”などの言葉でよりも、“脳”という言葉で語られるほうが、より“科学的”なイメージで受け取り、より信頼し、より好む、というだけのブームが現在起こっているということなのかもしれない。そうでないことを祈りつつ、“脳”研究の進展と、ここしばらくの“脳”ブームとを見つめていきたいと思う最近である。

(あべ・じゅんいち、北海道大学大学院文学研究科)